
魔王代理人の日頃

霜月ゆのみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王代理人の日頃

【Nコード】

N7432Z

【作者名】

霜月ゆのみ

【あらすじ】

突如、謎の現象に巻き込まれた高校生兼根っからの主夫体質『回座宗谷』は、いきなりの如く常識外れの異世界にたどり着いていた。そして急に課せられた正式な魔王が決まるまでの『魔王の代理人』としての役目。しかし、前魔王から受け継いだ魔核をもつ宗谷は、正式な魔王になる権利があるため、半ば無理やり『国立アーザック王族学院』に魔王候補生の一人として入学させられた。魔王級の魔力を持つが、魔力の扱いは子供以下……こうして彼の非日常の人生がスタートした。

1 壱 事実は小説よりもヤバイ

『神隠し』

人間がある日突然、山や森などで行方不明になる現象。

誰もが一度は耳にしたことがあるがこの単語は、実は案外身近に存在しているのではないだろうか。

道端に落ちている石ころのように、隅に生えている雑草のように人はただ気に留めていないだけで、この謎の現象は、当たり前のように起こっているとすれば。

無力な人間は、一体どうすればいいのだろうか。

抗おうとするのだろうか？

打ち勝とうとするのだろうか？

考えるまでもない。

手の打ちようもなくその現象に巻き込まれるのが関の山だろう。

人が消えるのを。

人がいなくなるのを。

呆然と見るだけでお終いだ。

だが、ここで気づいてほしいポイントがある。

『神隠しに巻き込まれた人間は、どうなるか』である。

死ぬ？消滅？

いやいや、なんでもそうネガティブ考えるものではない。

実際に、現在進行形で『神隠し』にあったと思われる俺が生きているのだから間違いない。

俺の考えを教えてやろう。

『パラレルワールド 平行世界の出入り口』

人間には解明しきれないこの世界。

何があっても不思議ではない。

宇宙なんて難問の塊も存在する訳だし。

もしも^{パラレルワールド}平行世界が実在すれば、そのもう1つの世界は一体どんな

ものだろうか。

言語が違つかもしれない、独自の社会構成で成り立っているのかもしれない、文明が飛躍的に発達しているかもしれない、遺伝子そのものの仕組みが違つかもしれない、もしかすれば……なにかもが……全てがまるで違つかもしれない。

しかしこの考えは、あくまで俺の推測で、憶測だ。

そう考えないと今、俺がいるこのおかしな世界に納得がつかない。ある意味、この考えは俺を安心させるために俺が勝手に考えた絵空事なのかもしれない。

まあ、絵空事であろうが妄想だろうが、本当の【答え】というものは存外、簡単に知ってしまうのかもしれない。

いきなりですが、ただ今この俺こと回座宗谷^{かいざそうや}は危機に陥っています。

なんと、気付いたらちようど目の前で3人ほどの見ず知らずの方が長い刃物を俺の首元で止めて、動きを封じているのです。

あれ？ 一体どういうことだ？

落ち着け、落ち着くん……こういう時こそ慌てず、冷静になつてこの状況を把握するんだ……。

状況説明開始！ 両腕と全身を縛られ、口は布で縛られ声が出ず、謎の薄暗いかなり広い部屋の真ん中でなんか変な服を身に纏った仮面の奴らが1000〜2000人の大群が取り囲みつつ、なんか意味不明な呪文のようなものをかれこれ1時間ほど唱えている。

うん、理解不能。

えっ、何コレ、新手のいじめ？

「~~~~~！」

声を出そうとしても、やはり縛られている布のせいかまったく声が出ない。

現状を把握できない俺を、ひたすら無視するように周りの奴らは一心不乱に呪文を唱えあげている。

新手のいじめなら、俺は教育委員会に駆け込むところだが、雰囲気はどつちかというところとちょっとヤバめの宗教団体だ。

何故このような状況にたどり着いたのか……正直自分でもよくわからなかった。

しかし、覚えている範囲でこの事態になるまでの経過を巡り返そうと思う。

もしかすれば、何かこの現状に至った原因が見つかるかもしれない。

今日、俺は近くの高校に入学したばかりの世間一般でいう高校1年生で、つい先ほど入学式を済ませたばかりであった。

俺の住んでいる場所は、いわゆるド田舎というワードがしっくりくる、辺り一帯のほとんどが田んぼと山。

交通の便は、1日数本しか通っていないバス。

電気製品などほとんど目にしない、かなりのザ・田舎である。

俺はいわゆる天涯孤独というものであり、血縁関係を持った知り合いなど、生まれてこの方会ったことがない。

へその緒がついたまま、ゴミ捨て場に捨てられていたところを、警察が発見。

そのまま一時的に保護された。

だから俺は両親の顔も知らないし、誕生日すら知らない。

一応施設に引き取られ、推測で年齢を決定。

俺は16歳だが、15歳でも17歳でもありえるということだ。そんな過去を持つ俺だから。

家族という家族が存在しない。

奨学金と、近所の人の手助けもあり、俺はこうして高校生になる

まで立派に成長できた。

だが、高校生になったからといって、まだ一人前になれた訳ではない。

しっかり勉強に励み、しっかりとどこぞの企業に勤め、給料をもらって一人前だ。

もちろん、年齢が進むにつれ、金の入用は仕方のないことだ。

今までは新聞配達などで生計を生きるか餓死するかの瀬戸際で立ててきたが、さすがに高校にもなると無理がでてきた。

俺は入学式が終えた日に、節約の一環として、校舎から数十分の山に山菜を採っていたはずだった。

そんな時に……だ。

山菜を探しているうちにかなり山の深いところに来てしまい、引き返そうと足を帰り道の方へ向け、歩き出して数分後。

急に気分が悪くなってきたのだ。

今にも吐き出しそうになる、そんな気持ち悪さ。

吐き気だけではない。

まるで壊れたラジオのノイズを、大音量で頭の中に無理やり突き込まれ、掻き混ぜられるような、そんな激しい頭痛までもが襲ってきた。

気持ち悪い。

[illegible]

何が起こっているかが分からなかった、理解できなかった、把握できなかった。

状況を掴めないまま取り乱した。
現状を理解できないまま混乱した。
その瞬間。

目の前で亀裂が走った。

俺は思考が停止した。

別に、たぶんあの時の状態なら、俺は大木に亀裂が走ろうが、大地に亀裂が走ろうが、たとえ海にさえ亀裂が入ろうが軽く驚く程度で済んだと思う。

だが、そんなレベルの話じゃない。

そんな低い次元の話じゃない。

亀裂が入ったのは……空間である。

いきなり目の前で何も無い場所に亀裂が入ったのだ。

全人類の常識から外れている。

まったくもって、分からない。

この意味不明な現象はいつたいなんなんだ。

亀裂の周りは、何故か景色が歪んで見えた。

まるで、空間がねじ曲がっているような、世界の仕組みにズレが生じたように。

亀裂は少しずつ、少しずつと、ちょうど大人一人分入れそうな大きさの穴にまで広がった。

俺は6分の恐怖と4分の好奇心で、その穴に歩み寄った。

穴の中は暗い……いや、暗いでは御幣があるかもしれない。

『闇』

ここではそう解釈した方が正しいだろう。

まだ日が十分に昇っている時間帯に、その穴はまるで光が入るのを拒むように、その穴の中は『闇』で広がっていた。

恐らく、地獄というものはこんな場所なのだろう。

なんて悠長な事を考えていたら、吐き気がまた襲ってきた。

俺はその正体不明の『闇』から、逃げるように帰ろうとした。
足を方向転換させ、自分の足で大地を踏み締めようとした。

だけど、俺は足で地面を踏みつけられなかった。

穴が……引きずり込んでいるのだ。

吸引というのは少々違う、まるで俺だけを限定した引力のような、不思議な力で穴へと誘導されようとした。

逃げるという選択肢は、完全に無効かされた。

全身に力を入れようとしたときにもう穴の淵にいた。

そして　俺はその穴に引きずりこまれた。

急に、咄嗟に、体を動かす暇も、反応する隙も。

その穴は決して許さず、重力を無視するように、気付けば俺は引きずり込まれていた。

走馬灯が走る猶予さえ与えてくれないその穴は、俺を静かに、一瞬で引きずり込んだ。

意識はまるで眠る様に、抵抗すらできず失っていた。

まあ、そんな経緯があり、俺は意識が戻ると、このような状況にあるわけだが……。

ダメだ、まったく分からない。

そんな考え事をしていると、周りの奴らが唱えていた呪文と思われるものが一斉に止まった。

すると、大群の中から1人が俺の目の前に歩み寄った。

ちょうど俺と間が1mほどの地点に立つと、俺の首元に刃物を向けていた3人組が刃物を鞘に納め、引き下がった。

歩み寄った1人が片手に掴んでいた杖のようなものを上へ掲げ、大群の方へ向きなおした。

「準備は全て終了した。ではこれより、『魔王封印の儀』を執り行なう。各地から集まった名のある高僧達よ。己の全力を尽くし、封印術式を展開せよ……！」

いきなりだがここで、分かったことが4つある。

1つは、俺の目の前に歩み寄った奴は、声からして高齢の男性と
いうこと。

取りあえずここでの呼称は老人とでもしよう。

2つは少なくとも此処は日本語が通用するらしい。

最初にとある外国の彼方へ拉致されたと思い、低い英会話力でど
う乗り越えるか真剣に少し考えていた自分が恥ずかしい。

3つは、ここにいる人間は聖職者のようだ。

見ず知らずの人間が言った言葉を信じるのもなんだが、冗談をい
える雰囲気ではない。

先ほど言い出した中二病的発言もおそらく冗談ではない。

4つは……ここでは常識が通用しないということだ。

何故そう思ったか。

そんなのは至極簡単だ。

周りにいた仮面の人間どもが一斉に人差し指で宙をなぞると、ま
るで空間に映像を投影しているように、六芒星や五芒星といった、
漫画やアニメの魔法使いが使ってそうな魔方陣が、宙で組みあがっ
ていくのだ。

トリック？ 手品？ 奇術？

そんなものではない、コレは俺が見る限り、正真正銘の『魔法』
であつた。

根拠などは存在しない、だが十分に分かる。

こんなものが、手品なんかじゃできないことくらい。

呆然としながらやや状況に戸惑っている時だつた。

目の前に巨大な箱が数十人がかりで運ばれてきた。

んっ？ なんだコレ……？

箱は先ほど運んできた者達が、手際よく次々と解体していった。
フタを外し、側面を壊し、箱は本来の姿を失っていった。
少しずつ、少しずつ中身が見えてきた。

そしてその中身は 人間の死体であつた。

「……」

箱の中に入ってあったのは、大柄な男であった。

戸惑いが倍増してしまったが、どうやら虫の息ながらも生きていた。

いや、この状態を生きていると言っているのだろうか。

身長は3m以上はある大男が、全身を隠すほどの大量の4mもの巨大な釘で固定され、四肢は削ぎ落とされ、両目は潰され、耳は落とされ、さらには体中に火傷、凍傷、切傷、刺傷……一体どうすればこうなるのだろうかと思ってしまうほどの、怪我を負っていた。だが生きている。

この男は一体何者なのだろう。

しかし、そんな考えをめぐらす時間もなく突如、周りにいた奴等が詠唱を始めた。

大男と俺は、先ほどの大群が創り上げた眩しい光を放つ魔方陣に、まるで虫を閉じ込めるように魔方陣で四方を取り囲まれ、大男は詠唱と同時に禍々しい光に包まれ、肉体は溶けるようになっていき、小さく紫色の弱弱い光を放つ人魂のようになった。

と、いかにも常識外の事が起こりすぎて驚くことさえ馬鹿馬鹿しくなってきた。

その人魂のような紫の光はこちらに向かい、なんと俺の心臓部分へ溶け込むように入っていた。

「~~~~~!?!」

激痛、いや激痛なんかで表せるものじゃない。

俺の体に、異物が入ってくるのがしつかりと、気持ち悪いほど鮮明に認識できる。

ジグソーパズルのピースを、まったく違う箇所になじ込んでいるような。

違和感で体が埋め尽くされるような。

死痛。

「~~~~~!?!~~~~~!?!」

苦しみで悶え叫ぼうが、涙を流そうが。

声は出ず、涙にはなんの意味さえも無かった。

一体なんなんだ！？

ここは何処で、お前らは誰で、何が目的で、俺の体で何をしたんだ！！

「……すまないな少年。だが許せ。我らの正義のため、安らかに逝ってくれ。恨むのなら『迷界』^{アナザー}からここへ来てしまった自分を恨んでくれ」

迷界！？ 自分を恨め！？

一体何を言っているんだこの野郎っ！！

しかし、どんなに思考を行おうが、痛みは全身を蝕むように進んでいく。

……死ぬのだろうか。

まあ……別にどうでもよくなってきた。

人間、諦め肝心だ。

16年という短い人生だったが、特に思い返すような走馬灯は存在しない。

このかた俺の人生に幸せというものはあっただろうか。

家族はなく、周りからは哀れみの視線を受け、思い出の欠片もな

く。
誰にも見向きされず、関わりを拒まれ、気持ち悪がられ、捨てられた。

頑張っても頑張っても。

誰も俺に関心を寄せてはくれない。

向けられるのは、カスみたいな偽善と、しょうもない同情だけ。そんな。

ただひたすら、生きることのみに執着した人生に。

意味は……あっただろうか。

……幸せになりたかったな。

「生きたいのか？」

！？

突然、誰かに声をかけられた。
周りにいる奴等ではない。

それだけは言える。

断言できるのだ。

その声は、まるで直接脳に伝えているような、不思議な感覚であった。

「生きたいのか？ と、聞いてるんだよ。 さっさと答える糞子^{ガキ}供がっ」

口は悪かった。

しかし低く、重圧感のあるその声は、ひたすら俺の脳へと伝えられていく。

どこか恐怖を…… 畏怖さえも感じさせられるその声は、鮮明に俺の元へと届いてくる。

生きたい…… いや、死にたくはないけど、生きる意味も特にな…… な。

「そうか、なら遠慮なくその体を使役させてもらっわ」

刹那、俺の体から痛みが消え、逆に力が湧き出てきた。

いや、力という簡単な言葉でかたつけていいのだろうか。

全身から今にでも放ちたい、この膨大の力を。

俺は…… なんといいばいいのだろうか。

何処からやってきたかも分からず、泉が湧き出すように、急に内部から放たれたこの力を。

縛っていた縄を強引に引きちぎり、布を取り、豪快に立ち上がった。

…… んっ？ 体が勝手に…… 動いてる？

それと同時に、今まで俺を囲んでいた魔方阵が、光の砂のように綺麗に散っていく。

「…… ど、どういうことなのだ！？ 術式が…… 崩れていく！？」
俺の目の前にいた先ほどの老人が、宙に描かれていた光の魔方阵が消えていくのを、焦りながら見ていた。

「なあに、焦んなよ糞野郎共。単に『生体を別生体を生贄にして双方を完全消滅させる』という高位禁魔法も、その生体が先に死んでしめえば、そりゃあ誤作動も起こすわな」

「口が、勝手に!？」

「ど、どういうことだ! お前……一体その人間に何をしたっ!？」
先ほどの老人は、顔にはもう恐怖と混乱しかない……追い詰められた果ての表情を残しつつ疑問を投げつけ始めた。

「ああ、どうせ後先短いことは分かってたしなつ。どんな強大な魔力を持っていようが、さすがに350年は生きすぎた。肉体も精神もへとへとだ。だから決めた。この子供に吾輩の魔核^{ガキ スキル}を全て移してやるんだ。我ながら面白いことを考えたと思ってるよ」

「なんだと……! ま、待て!」

「いや、もうお前うぜえから黙れ」

俺の手(いや、勝手に操られているのだが)が老人に軽く触れると、老人はありえないほど遠くまで吹っ飛び、壁に衝突した。

「少々、眠っといてくれや。さてさて、おい子供^{ガキ}、聞こえてるか?」
聞きたくねえけど聞こえてるよ……。

「そうかいそうかい(笑)、まあ良い。取りあえず、今さっきお前に吾輩の全魔核^{スキル}をくれてやった、感謝して受け取れ」

はっ!？ 魔核^{スキル}!？ 一体なんなんだよっ! 何の話なんだよっ
!!

「まあ落ち着け。まだ『迷界^{アナザー}』から来たばかりで混乱してると思
うが……。取りあえず、手筈なら吾輩の部下がもうすぐ来る。説明
は全部そいつに聞け、魔王の代理人(笑)」

だ、代理人……?

「ふむ、さすがにそろそろ限界だわつ。……じゃあな、子供^{ガキ}」
!!

体が急に軽くなった。

と、というか元の状態に戻ったと言えはいいのだろうか。
体中を縛っていた鎖が、切れたような感覚だ。

おお、やつと自由に……！！

そんな感傷に浸っている時だった。

頭上から爆音が轟いた。

上から美少女が降ってきた。

……………。

いや、違うよ？

別にアニメであるような、『お空からかわいい女の子が落ちてきた』みたいな可愛いものではなかった。

片手には俺の身長ほどう大剣、首から上以外は鋼色に輝く鎧に包まれた身なり、異常なまでに整った顔立ちと、腰まではあろう絹のような黒髪をなびかせ、悠然と俺の前に立ちはばかった。

クールな無表情と、どことなく侍のような雰囲気を感じさせる彼女は、美しく、凜としていた。

……あれ？ 確かここ室内……。

上を見ると、やや予想通り、天井が見事に大剣で破壊されたような巨大な穴があり、そこからは満点の星空が綺麗に広がって見えた。わー星がきれい。

そんな軽い現実逃避を、現実には許さないように、俺を引きずり戻した。

いきなり侵入した女は俺を見つけると、いきなり胸ぐらをつかんできた。

「……貴様が『代理人』か……。魔王様も運が無いな、このような貧弱でいかにも間抜け面をした男を引き当ててしまうとは……」

口の悪い女は、そう言い残すと体が紅蓮の炎によって消し炭となった。

おそらくは少年に吐いた暴言に、神は激怒したのだろう。

「語り部を捏造するな」

ぐはっ！ なんて美しい関節技……！

「時間が無い、さすがに私でもこの人数は骨が折れる」

「奇遇だな、俺もこのままだと右腕が折れる」

いつまで関節技を決めているつもりだっ……骨がミシミシと悲鳴を上げてやがる……。

「では逃げるぞ」

そう言い残すと、謎の女は俺をひょいっと軽々と片手で持ち上げ、なんと5m以上あった天井の穴まで飛び上がったのか。

人間じゃねえなこいつ。

絶対何処かの戦闘民族だよ、尻尾はないけど。

「に、逃がすと思うか！ 全員、術式展開準備っ！」

中にいる奴らが一斉に構えだし、またもや魔方阵が次々と現れているが、おそらく無駄だろう。

理由？

俺の目の前には巨竜ドラゴンがいるからだ。

某有名ゲーム風に言うならば、『ドラゴンが現れた！』みたいな頭には3本の角が生え、巨大な2枚の羽根を揃え、一体全体何mあるんだよと突っ込みたくなるほどの巨体で待機していた。

「きよ、巨竜ドラゴン！？ 何故そのような生き物がここに……！？」

「答える義理はない」

そう女は言い残すと、俺も（無理やり）乗っている巨竜ドラゴンが勢いよく、その巨大な2枚の羽根を羽ばたかせ、夜の夜空へと舞い上がった。

舞い上がったと思えば、一瞬景色が消えて見えるほどのスタートダッシュで移動し始めた。

「安心しろ、にゃん太郎は他の巨竜ドラゴンとは桁違いの速度スピードを誇っている。まず追いつかれることはない」

「にゃん太郎？」

「この巨竜ドラゴンの名前だ、私がつけた」

ネーミングセンスは0だった。

気付くと、先ほど俺がいたと思われる建物はすでに小さく遠のいていた。

建物は小さくなったとはいえ、この距離でも分かるほど巨大で立

派な造りの赤褐色の建物だった。

一体、俺はあそこで何をされ、何がおきたのだろうか……。それはそうとも、巨竜トリゴンの物凄い速度のせいか普通に息苦しいし喋りづらい。

それに、この常人なら気絶しそうな高さであまり驚かないのも、今日だけでも驚きの連続で、驚き疲れた……。みたいな感じた。

風がなびき、ただひたすらに巨竜トリゴンに乗りながら、前へ前へと進んでいる時だった。

いきなり俺の目の前に現れて、俺をさらっていった彼女が俺に視線を向け、至極真面目な表情で口を開いた。

「さて、そろそろ話そうか。何故お前がここにいて、ここがどういう世界か。そして、これから何が始まるか……。聞く準備は良いか？」

『魔王の代理人』」

1 貳 住めば都か魔王城？

『常識』

一般の社会人が共通に持つ、知識・意見や判断力を指す言葉。意味の通りに見ていくと、常識とは人間の当たり前だと思っていることを言っている。

だが、常識とは人によって変わるものだ。変化し、移り変わり、変わりゆく。

必ず、人個人の常識をみんな持っている。

簡単な例をあげると、『卵焼きにはケチャップ』という人もいれば『卵焼きには塩コショウ』という人もいるだろう。

まさしく十人十色、千差万別、多種多様。

だがしかし、個人の常識というのは、個人の価値観にも繋がってしまうのではないだろうか。

『こういうのが良いらしいから、こういうのが良いんだ。』

そんな子供みたいな戯言を吐いてしまう原因は、常識が価値観を創り上げているかもしれない。

だから語り部の俺から読み手に伝えよう。

これから語るこの『常識』を。

既存の『常識』を全て捨てて。

受け止めてほしい。

この世界では『常識』なんて、何の意味も果たさないし、この世界の常識は、既存の知識を驚かせる。

冷たい風が吹く抜く中、俺の前に突如現れ、そして連れ去った謎の女が、長い黒髪を靡かせながらもそのポーカーフェイスを保ちつつ、ゆっくりと口を開いた。

「先に自己紹介だ。私は十乃字小夜^{じゅのじや}。歳は16、特技は剣術。好きなものは甘いもの。嫌いなものは下衆な人間だ」

最初に彼女の口から出た言葉は、普通の女の子（？）らしい自己紹介だった。

案外、話の通じるやつなのかも知れない。

「俺は回座宗谷^{かいざそうや}。同じく16歳で趣味は料理。好きなものはこれと違ってなし。嫌いなのは汚い場所」

「男のくせに料理とは女々しい趣味だな。好きなものがないとは個性がないのかお前には。汚い場所が好きな人間はいないし、後、私を呼ぶときは十乃字と呼ぶように」

役7秒弱で俺の自己紹介は貶された。

汚い場所が嫌いというのは潔癖症という意味合いでいったつもりだったんだが……。

まあ、後は否定できないな。

「それは置いといてだ。で、本題に入ろう。まずここは何処なんだ？」

「日本だ」

簡単な返事が返ってきた。

……はっ？

「ジャパンだ」

「いや、言い換えなくていいよ」

「より詳しく言うのなら、ここは日本の三河辺りだな」

「み、三河？」

三河って確か今の愛知県の旧名……だっけな。

中学生の頃にならった記憶がある。

どうということだ？

俺はあの『闇』に引きずりこまれた後、タイムスリップしたということか？

魔法みたいなのを普通に使っている世界だ。タイムスリップがあったて不思議じゃない。

よし、すこし質問をしてみるか。

「なあ十乃字、パソコンって知ってるか？」

「ぱそこん？　なんだ？　刀の名前か？」

よし、タイムスリップかこの女が物凄い馬鹿なのかの2択になった。

そう考えると思い当たる節もある。

先ほどから巨竜ドラゴンの上で景色を見るにしても、森林が多く、ビルなどの高僧物などは見当たる気配もない。

夜なのに街明かりなどは全く見られない。

十乃字が言ってる通り、ここが三河……愛知県だとしても、こんなに田舎ではないと俺でも分かる。

しかし、過去に来たということを肯定すると、昔、魔法のような不思議な力が実在していたという話になる。

実在していたならば、何故現在にはないのか。

教科書にすらそのような事実が載っていないのか。

様々な疑問点が浮かんでくる。

パラレルワールド
「『平行世界』」

「はっ？」

いきなり十乃字の口から飛び出てきた言葉は、俺の思考していた考えとはまったく違う単語であった。

「この世界は、実は1つではなく、もう1つ平行している世界がある。その2つはまったく同じ様に、文化も、科学力も、人の数も顔も性格も。まったく同じ世界がある」

十乃字はおもむろに、訳のわからないことを語りだした。

一体その話が何の関係があるんだ……。

「だが、ある時。片方の世界で誤差が発生した」

「誤差？」

「隕石が落ちてきたんだ」

隕石？　あの宇宙の方の？

「その隕石はかなり巨大なものだった。数々の国ががまるまる消え

るほどにな。だが、恐怖する点はそこではない、その隕石といつしよに飛来してきた『何か』だった」

「『何か』？」

「そう、『何か』だ。全てが不明。全てが未知。ただあったという存在しか分かっていない『何か』。その『何か』は片方の全ての有機物、無機物に激しい影響を与えた。生命体の突然変異、無機物の効果の変化。誤差は誤差を生み、その誤差は更なる誤差を生みだした。新エネルギー、新生物、新人類。その結果、2つの世界はまったく違う世界と変貌してしまったのだ」

……だんだんと、自分が何処にいるのかが分かってきた。

分かりたくもないが、現実を受け止めるのが大人というものだろう。

「つまり、俺は片方の世界から、このもう1つの世界へ来てしまった……」

「『ご名答。私たちはそっちの世界を』^{アナザー}『迷界』^{アナザー}って呼んでるがな」
『迷界』。

確か俺が捕まっていた場所にいた老人が言っていた単語だった。基本的に、2つの世界は干渉し合わずに時間を経ているのだが、たまにあるのだ。2つの世界を？ぐ出入り口が出来上がることが」

出入り口、つまりあの時俺が見た『闇』だろうか。

「こっちの世界で高エネルギーを発生させると、2つの世界を隔てる境界線を歪ませてしまう。そして、その歪みから出来た出入り口を通過するともう1つの世界に行けるわけだ。まあ、稀な現象だから、こっちの住人がそっちに行くとはほぼ確実にこっちには戻ってこれないのだ。もう1つの世界を、まるで迷路に迷う様に。だから^{アナザー}『迷界』。そして、その世界から出入り口を通り、やってきたのがお前ということだ」

「……マジかよ」

「アジだ」

「いや、字面は似てるけど勝手に魚類にするな」

「ちなみに、こちらの世界から迷界^{アナザー}へ行った奴らは、超能力者^{エスパー}、化物^{モンスター}とか呼ばれているそうだがな」

なるほど、そう考えると、神話や日本の文献にもあるような、人外のものは、こっちの世界から来たということなのかもしれない。おとぎ話みたいな話だったけど……いや、まだおとぎ話の方が夢がある。

正直、まるで道化師に騙され続けているように、詐欺師に欺かれ続けるように。

俺はその話を聞いても、納得したようで信じられない。

まあ筋は通るだろう。

どんなことだろうが、過程が変われば結果が変わる。

この世界はどうやら、地形なんかは基本的には同じみたいだが、土地の名前、文化の進み具合、生物の種など、様々なものが違うみたいだ。

「丁度お前も見ただろう。お前が捕まっていた所は何千人もの高僧たちが、1人だけでもかなりのエネルギーが必要になる禁魔法……その高位クラスのをあれだけの人数で行ったら、出入り口ができるほどのエネルギーにギリギリとどく可能性がある」

それでもギリギリとは、本当に稀な現象みたいだ。

そして、その稀な現象に俺は巻き込まれてしまった……つと、いう訳か。

「……俺もついてないな……そんな出入り口に出くわすとは」

「まあ、あの現象を起こしたのは魔王様のせいみたいなものだからな」

「起こしたのは？　つまりその魔王様のせいで俺はここにきたと？」

「ああ、そうだ」

「で、お前のいう魔王様っていうのはもしかして俺がいた場所にいた大男？」

「恐らくその方だ。日本国王第76代目魔王、無間蛻^{むげんぬけがら}様。先程、お前に魔核^{スキル}を授けて逝かれたがな。で、私はその無間様の直属の部下

で、色々と良くして貰った」

「なるほど、部下……。だけど簡単に逝かれたって言うけど……その、なんだ……悲しくないのか？」

「ないな」

断言しやがった。

もうキツパリ言い過ぎて、逆に清々しいというか男らしい。

「と、いつて実は影で泣いてたんじゃ」

「この足は折れたいらしいな」

「すみません、全力ですみません」

この女、俺を反応する隙さえも与えず四の地固めに持ち込みやがった。

今日2回目の骨からのS Sが全身を伝っていく。

というか、今乗っている巨竜ドラゴンがいくら巨大でも、こんな足場が悪い所でよくこんなスピーディーに動けるな……。

四の地固めは、俺の必死な謝罪によって解放された。

「まあ、元々ご自身でも『吾輩もそろそろ限界だしな』。仕方ない、何か面白いことでも探しに行くか」と前々から呟いておられたしな」

軽いな魔王……。

というか、何が仕方ないんだよ。

「そこで、魔王様が思いついたのが『魔王の代理人』探した」

「『魔王の代理人』……、確か俺も魔王にそんな事いわれたなっ……

……あつ、もしかしてさっきの『魔王様のせいみたいなもの』ってのは、魔王は2つの世界を？げるのに一役かっていたってことか？」

「そつだ。ご自身の死期を悟っておたれた魔王様は、予め『魔王の代理人』となる人間……つまり迷界アナザーの人間を呼ぶために、わざと敵国の人間に捕まり、高僧達を呼ばせ、そして大量のエネルギーをご自身の力を加えて出入り口を作ったのだ」

「敵国？」

「この国では、『魔王』というのは役職の様なものだ。国の政治を

担い、常に国のために行動し、全ての決定権を持つ絶対の王。それが『魔王』だ」

「いや、別に普通に王で良いんじゃない……」

「仕事がそれだけならな。魔王の仕事は他にもある。例えば……戦争とかな」

「せ、戦争？」

「国の領土争いは深刻な問題だ。この世界には『侵略者』^{ブレデター}という戦闘型の国と『平穩者』^{ピースベース}という非戦闘型の2種類の国におおきく分かれる。侵略者は領土を奪うため、兵器を量産し、軍事力を高め、次々と他国を侵略していく。平穩者も領土を守るために、自国の軍事力を高める。しかし、兵器や武器といっても、弓や刀、最近広がってきた火縄銃はあまり使われない。理由は簡単。争いで勝利の鍵となる、兵器をも凌ぐものが存在する。それが『魔法』だ。お前の世界には無いらしいが、この世界は在りとあらゆるものには『マナ』、別名『魔力』と呼ばれるものが含まれている。人間にも、虫にも動物にも。エネルギー体なのか、未知の物質なのか。まだ完全に解明しきれていない『マナ』だが、人間はその『マナ』を操作する『魔核』^{スキル}を携えている。魔核は優れば優れているほど、その外部の『マナ』を操作できる量が決定される。そして、『マナ』は人間によって変換・操作され、魔法となるわけだ」

「先生、頭が痛くなってきました」

「お前、折られるなら何処がいい？」

「と、思いましたけど頑張ります」

この女、本気で折るつもりだったぞ……。

目が本気だ。^{マジ}

「よし。では続けよう。で、その『マナ』と呼ばれる魔力を大量に操れるほどの魔核^{スキル}を持つ、魔の王。つまり巨大な力を持つものこそが、魔王になれるわけだ。そして、前魔王、無間様は過去に例をみない、強力な魔核^{スキル}を持っていた。全力をだせば1人で1つの国をも滅ぼせるほどにな」

おお、あの人そんなに凄い人だったのか……。

ん？ そういえばその人の魔核^{スキル}って……。

「もしかして、今その魔核^{スキル}ってのは……」

「もちろん、お前が受け継いでいる」

……予想通りだった。

「なんで俺が持つてるんだよ！！　というか受け継げるものなら他のやつらに継がせるよ！！」

「それが出来れば苦労はしないし、だからお前が呼ばれたんだ。魔核^{スキル}はこの世界の人間なら誰でも持っているもの。魔核^{スキル}は本来、受け継げるものじゃない。誰かに授けようとしても、どうしてもその人が持つている魔核^{スキル}が邪魔になる。だが、魔王様は考えた。『そうだ、もう片方の人間を適当につれてきて継がせちゃえばこの国安泰だな』と。確かに、もう1つの世界の人間は、魔核^{スキル}を生まれつき持つていない。ならば拒絶反応も起こさず、すんなりと継げるわけだ」

「な、なるほど……」

分かった様で分らない。

と、というか話が難しくてややついていけない。

「あくまで魔王というのは、他国に自分たちの領土を攻めさせないようにするための脅しの象徴みたいなものだ。基本的には争い事のような役割は無い」

「よかった……」

「まあ、暗殺はされるかもな」

「ダメじゃん！」

なんで暗殺されなきゃいけないんだよ！？

「そして、その魔王にお前が代理を勤める訳だ」

「いやだぁー……あれ？　ちよつと待てよ……。何故『代理』なんだ？　流れだと就任くらいいくかと……」

ある意味、俺は魔王の後継者みたいなものだ。

おいおい、^{タイトル}題名を変更しなければならぬじゃないか。

これからは『魔王の後継者』で再スタートしないと……。

「愚か者」

一喝された。

「魔王は魔核^{スキル}、知識力、精神力などなど、総合的な力を見て決定するものだ。お前以外にも候補生はいる。本来、候補生から次期魔王を決定し、正式な手続きが終わり次第、現時点の魔王が引退し、次期魔王が正式な魔王となるのが、正しい順序なのだが……。今回は現時点の魔王が死んでしまうという事態にいたったため、次期魔王が決まるまで、代理が必要な訳だ。つまり、その間は」

「俺が代理……つと」

「そう。まあ妥当な判断だろう。無間様ほどの魔核^{スキル}を受け継いでいるものだ。政治はともかく、他国を恐ろしめるくらいはできるだろう。一応、代理でもあるが、無間様の魔核^{スキル}を継ぐ者として候補生にもなるだろう。候補生等が通う学校にも通ってもらう」

この世界に来ててもやはり学校は行く運命だったか……。

「……と、いうことは正式な魔王が決まったら俺は代理人から解放され自由？」

「まあそうなるだろうが……。いいのか？」

「なにが？」

「候補生である間は費用は国から出るため、衣食住には困らず、更に魔王になれば元の世界に戻る機会があるかもしれない。しかし、候補生を終わり、正式な魔王になれば、一生この世界で身分不明の人間で、職にもつけず、餓死するしかないぞ？」

「ぬっ……」

この女、俺を脅しているのか……。

確かに今の俺の所事物は、現時点で来ている衣服と、ポケットに入っていた、高校でPTAがお祝いに配布していたプチホットケーキというお菓子オンリーだ。

これだけでこの世界を生きることなんて到底不可能だし、まして魔王になれば元の世界に戻るチャンスも巡ってくる可能性が0でもない……。

「そういうことだ。まだ分からないことがあれば自分で調べればいいし、これからはしっかりこっちの学園にも通ってもらうしな」

現時点でおかれている状況は、大まかだが理解できた。

疑問点もいくつかあるが、それはまた別の機会にでも調べよう。

だが、まだ1つ。

1番気になる、疑問点が存在した。

何故、この女がそんな事実を知っている、ということだ。

平行世界パラレルワールドの存在を知り、様々な知識を所有し、全てを分かり切ったような語り口調で、俺に色々なことを教えてくれた。

まるでプレイ中のチェス盤を眺めているように。

どんな事をも知っているように。

何にせよ、十乃字氷雨。

本当に謎だらけの女であることは間違いない。

「そろそろ着くぞ、振り落とされるなよ」

「はっ？」

考え老けていた俺を構わず、十乃字はそう言い出すと、巨竜ドラゴンがフリーフォール真つ青の速度で急降下していった。

「ぎゃああああああああああつあつあああ！？」

物凄い速度スピードで急降下ドラゴン。

取りあえず巨竜にしがみつき、振り落とされないようにしていたが、あつという間に地上に降り着いた。

巨竜ドラゴンが着地した辺りには、砂埃すなほこりが舞い、しばらく周りが見えなかった。

しだいに視界が良くなり前を見ると、そこにはいかにも魔王が住みそうな禍々しい城があった……訳ではない。

むしろ普通の城……というのも何か変だが、そこには俺の知っているような、和風の城があった。

俺の知識から例を挙げるとなると……外見や造りは姫路城にちかい。

空に向かって建ち並ぶ天守群と白く美しい白壁が広がり、天を舞

う白鷺のように見える、別名『白鷺城』と呼ばれる、あの姫路城に。

巨竜を降りれば、十乃字は普通に言った。

真顔で、変化の無い声で。

「ここが今日からお前の城だ^{いえ}」

俺の嫌な予感レーダーはびんびんであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432z/>

魔王代理人の日頃

2011年12月25日16時54分発行